

ホトトギス

十二月号

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日発刊
全昭和五十二年十二月一日発行（第四十六巻第十二号）



風雅の小筥〔七十〕

廣太郎

虚子が丸ビルにホトトギス発行所を移したのが大正十二年で、その年は御存知の通り九月一日に関東大震災が勃発した。丸ビルも、倒壊は免れたが、壁のタイルが剥がれたりしたという事を聞いた記憶があり、虚子はこの日鎌倉で被災し、東京は火災の被害が甚大で、地震の被害としては神奈川県の方がかなり甚大であったそうだ。この地震は首都直下型では無く、相模湾が震源であったという事も災いしたようだ。

三菱ビルに居た時の経験といえ、やはり東日本大震災である。平成二十三年三月十一日は金曜日で、普通にホトトギス社で仕事をしていた時の午後二時四十六分であった。震源は福島沖で、東北地方の被害が甚大であったが、事務所の辺りは震度五強であったそうで、私自身はそれまでに経験した事の無い揺れを感じた。丸の内から程近い九段という場所にある建物の天井が崩落して、一人亡くなったという報道もされていた。それでも人的被害は東北の比では無かったが、鉄道等の交通が悉くストップしてしまったのである。私はこんな事態も初めてであったので、電車もその内に動くのではないかと思ひ、夕方から近所の店で軽い夕食を摂ったが、いよいよそれも絶望的となった。ただ、次の日に千葉で関東ホトトギス俳句大会が予定されていて、その用意の為に自宅へは帰らなくては養らないと思ひ、意を決して、丸の内から目黒まで徒歩で帰ったのである。幹線道路は車の渋滞、というより完全にストップしてしまっていたが、それを横目に結局三時間で自宅へ着いた。その間に関東大会の中止の連絡を受けていたが、そんな事も今となつては思ひ出である。

旬日記 廣太郎

令和四年十二月一日 蕉心会

園丁の技藪巻の合せ目に
冬帝を誘ひ出したる雨男
短日や生きとし生けるもの忙し
雪吊の白き妖精待つ静寂
石路咲いて庭園の色蘇る
品格を水面に映し都鳥
新しきカフエを囃して笹子鳴く
山茶花に館の一年締めくくる
新しき句友華やぐ師走句座
冬帝に対時句作の女学生
十二月二日 六甲会

十一月三日 芦屋ホトトギス会
関東煮先づさへづりに迷ひ箸
汀子邸水音弾ける冬の朝
十一月四日 野分会芦屋例会ハイブリッド句会
故郷の今年限りや餅配
古曆残り一枚てふ重さ
十二月四日 青嵐会芦屋例会
息白く別れ話は唐突に
茅渟の海褥としたる群千鳥
息白く来て白々とつきし嘘
十二月七日 NHK文化センター
改札に師走の顔の吸はれゆく
冬帝の日矢ビル街に突き刺さる
都心には都心の流儀鴨の陣
一筋の雲に始まる冬日和
十二月八日 土筆会
冬ざれの園に未来の命秘め
白鳥に水の緊張解かれゆく
根深にもすつかり慣れて江戸に老ゆ
冬ざれの大地啄む一羽かな
老松の冬ざれといふ気品かな

白鳥の羽搏きにある乱れかな
十二月九日 工業倶楽部

冬芽抱く大樹は明日へ膨らめる
冬帝の機嫌に縮みゆく都心
雨に風にいよよ鎧へる冬木の芽
水鳥の地球凹ませ着水す

十二月十一日 九州ホトトギス同人会、大会

魚跳ねて水の冷たく流れゆく
純白の富士を眼下に旅師走
眠る山掠めて飛機の旋回す
角曲る毎に教会冬うらら
青々と大綿空を統べてをり
旅先であづかるミサや冬ぬくし
崩れても威光を放つ城の冬

十二月十二日 朝日カルチャー若草句会

潮騒を聞きつ旅寝の蒲団かな
団地てふ昭和近付け干蒲団
還りゆく魂の声とも虎落笛
短日や遣品整理のきりもなく
母許のもう使はれぬ蒲団干す

十二月十三日 大阪倶楽部

梯は光年に乗せ冬の星
鱸酒に海峽の灯の潤みゆく
板長の故郷訛河豚の宿

十二月十五日 前議員句会

街騒も聖誕節の音階に
寒禽に空明け渡す都心かな
その中の冬黄葉てふ孤独かな

十二月十五日 登高会

浮寝鳥水の分子を崩しゆく
おでん屋の隅に告白聞いてをり
おでん屋の出汁百年といふ老舗
寒林の枝に数多の命抱き
おでん屋の戸の軋みにもある歴史
百態を見せ整然と枯木立

十二月十六日 廣邦会

東雲や凍星一つ置き去りに
オクターブ上る街騒クリスマス
十二月二十日 北國文芸選者吟
返り咲く肥後椿てふ気品かな

十二月二十日 北國文芸新年詠

主亡き家明かしゆく初日の出

十二月二十二日 カトリック新聞選者吟

冬帝に押され待降節のミサ

闇汁の隅に何やら光るもの
兎汁山気もろとも煮込まれる
札納鳥居を潜るよりの黙

十二月二十五日 青嵐会東京例会選者吟

水鳥の水を解してゆく刹那
白々と都心冬帝司る
大綿の羽に靈気を閉ぢ込めて
亡き人の叫びとも聞く虎落笛
おでん酒酔ふほどに目の輝ける

十二月二十五日 野分会東京例会

あの日より捲ることなき古曆
あの家は新婚さんや餅配
餅配終へれば酒が待つてゐる
捨て難き最後の頁古曆

十二月二十七日 若水句会

粕汁を啜り波音近付ける
横顔の虚子めく漢懷手
懷手解いてくゆらす紫煙かな
庭の景在りし日のまま笹子鳴く

十二月二十八日 目黒学園句会

札納大本山の嵩を積む
心眼で闇汁の具をまさぐれる

雑詠

廣太郎 選

緊迫の阜月の海へ護衛艦
 一ミリの誤差無く注げる生ビール
 漫画より読む新聞や籐寝椅子
 万緑の壁に餌の礫かな
 片道のリフト日焼の十五分
 さそり座の尻尾まで現れきし夜涼
 月涼し敗者勝者と肩並べ
 反抗期汗疹に汗を滲ませて
 ヘネシーもオールドパーも梅酒瓶
 黴の香に埋れて一と日古書整理
 若き日の学び語りし黴ノート
 端居してまた語り出す虚子のこと
 リハビリの足躓くな蟻
 踏むな相模原木村享史
 リハビリの老足蟻の追ひ越して
 汗もなく終るリハビリ物足りな
 雲の峰初心は忘れ易きかな
 ことりとも音なき暮し竹落葉

太宰府 持永真理子

同

同 西宮 本郷桂子

同

同

同 東京 田丸千種

同

同

同 長岡 安原 葉

同

同

同 相模原 木村享史

同

同

同 熊本 岩岡中正

同

同

同

蟬のこゑふつふつ潺潺と水湧くごとし
 透明に喉すべり落つ心太
 片陰を身細うたどりゆきにけり
 星空を夜間飛行の灯涼し
 亡き人を想へば滲む揚花火
 橋の上背伸びして見る揚花火
 どんといふ響きを残し揚花火
 棚ごとくに四十八の青田風
 瑠璃色の空の欠片や夏の蝶
 汗かいてかいて信濃の風と逢ふ
 風抜けてゆくねむの花またたかせ
 花合歓や夢見る事を繰返し
 炎昼の街に我が影失ひぬ
 田水沸く大地溶かしてゆくやうに
 甚平を着ても四角き漢かな
 わが影を一枚剥がし衣紋竹
 動かぬは王者の証兜虫
 日を返す扇に銚の統べらるる
 箱庭の魚に水なきこと哀れ
 銚の辻風の澱んでをりにけり
 日傘なる小さき陰をたのみとす
 帰りきてクーラーつけてからのこと
 天地の静止してゐる暑さかな
 水の景隠し茂の景となる

龍ヶ崎 今橋真理子

同

同

大阪 酒井湧水

同

同

神戸 涌羅由美

同

同

袋井 湖東紀子

同

同

神戸 山田佳乃

同

同

同 和 田華凜

同

同

同 京都 山崎貴子

同

同

同 香川 湯川 雅

同

同

同